サクラやモミジ約1000本を植樹
入笠「花の里山」ボランティアに参加

植栽作業に励む町議

「入笠『花の里山』植栽ボランティア」は6月13日、富士見パノラマスキー場のゴンドラ山頂駅から入笠湿原入り口近くまでの林道沿いで行われました。富士見高校園芸科生徒をはじめ、企業・金融機関の従業員、一般ボランティアら約130人が参加。4班に分かれて、ナナカマド、ヤマザクラ、ヤマモミジの苗木約1000本を植えました。町議会議員は7人が参加して植栽作業に励みました。

ニホンスズランやクリンソウなど多彩な花が咲く入笠山（標高1955m）の美しい景観を後世に残そうと、2005年から植栽活動を始め、10回目になります。

今年は、長野市をメーン会場に県内で来春開く全国植樹祭の前イベント「苗木のホームステイ事業」として、実行委員会から富士見パノラマリゾートに苗木が贈られました。

昨年6月に入笠山を含む南アルプスがユネスコエコパークに指定されたことを受け、1周年記念事業としても実施しました。

参加者は鍬などで地面に穴を掘り、約1m間隔でポットの苗を丁寧に植え込みました。「自分の植えた木が立派に育ってほしい」との願いを込めて作業を行いました。初夏の観光シーズンを迎えた入笠山には多くのハイカーが訪れていました。

（川合弘人）

議員勉強会

「オリジナルな発想を伸ばすことが地域振興につながる」と語る羽生綾子さん

富士見町議会は、定例会最終日の6月16日、全員協議会室で議員勉強会を開きました。諏訪農業改良普及センター所長で諏訪地方事務所農政課長の羽生綾子さんを講師に迎えて、諏訪地方の農業全般について話を伺いました。

県職員となり農業改良普及員を長年務めてきた羽生さんは、「オリジナルな発想を伸ばすことが地域振興につながる」と基本的な考えを示しました。その上で、農家を何年か後にまた訪問したとき、「また来たかい」と親しみを持って迎えられることが普及員の勲章であり、「人脈を増やすことが大きな武器になる」と語りました。

諏訪地方の農業については、湖周3市町と八ケ岳山麓3市町村とは「際立ってタイプが違う」とし、耕地面積、農業人口などの統計を示しました。管内の農家数は6290戸。このうち専業農家は約1200戸で、「この数字を今後も維持していけばいい」とし、ここ数年で世代交代すると仮定し、新規就農が年間にどの位、農家後継者となることを目標にしています」と語りました。農業生産額の約半分が農家独自の販売か、直売所に出荷するか、契約栽培であると推察しています。

県内の農業生産額は平成3、4年ごろの4500億円がピークで、その後は下降しています。諏訪地方の農業業生産額は意外と少ない「諏訪地方は商工業、観光業の地域であることが分かります」と分析しました。
水稲栽培は管内全体で約２０００ヘクタール。この5分の1が富士見町内です。農家の所得を上げるためには「経費の掛からない、中間マージンの少ない農業経営を考えないといけない」と提言。

新規就農里親支援事業を利用すると、管内では他の地区に比べて定着率が高い。「市町村の理解を得ながら続けていきたい」と強調しました。

議員からは、「企業による作物の契約栽培や、耕作放棄地に対する再生支援」など身近な課題について質問がありました。

羽生所長からは、「企業との契約栽培は、農家の所得確保になるなら断るべきではないと思うが、企業は、景気によって左右される面も考慮するべき。また、現在の制度では放棄地に対するフォローがしきれてはいないが地域に応じた作物栽培など、複数の補助を活用してほしい」とアドバイスいただきました。

富士見町にとって農業は、主要な産業でもあり、広大な農地や数多くの農家があり課題を抱えています。官民一体となって農業を活性化できればと考えさせられる勉強会でした。